



スリランカの海辺にて

四天王寺大学副学長
人文社会学部 国際キャリア学科 教授

井川 好二

波が後から後から寄せてくる。大波小波がかなりの強さで海岸の岩場に当たって砕け散る。見ているとやや不安な気持ちになるが、現地の人にはどうということもない。普通の海の様子らしい。「ひねもすのたり」の瀬戸内海とはずいぶん印象が違う。

スリランカの南端に近いゴール市の海岸である。かつてはセイロンと呼ばれた島国。冬にはインド洋を東から西へ向かう季節流が付近を流れ、夏にはこれが反転する。

四方を海に囲まれたスリランカには、海路さまざまな文物が到来した。仏教も、ヒンズー教も、イスラム教も、そしてキリスト教もやってきた。それぞれに定着し、信仰は今も守られている。とりわけ仏教は人口の7割以上が信仰す

る。いわゆる「上座部仏教」で、この国からミャンマー、ラオス、タイ、カンボジアへ伝えられた。

西欧による植民地支配もやってきた。ポルトガル、オランダ、そしてイギリス。シナモン、紅茶、宝石などが大いに商品化された結果、富はヨーロッパに運ばれ搾取の爪あとが残った。ようやくの独立の末に内戦が勃発、国民同士が殺しあう。最近になってこの国にやっと平和が戻った。

宗教とは何かと考えさせられるスリランカである。

仏教で殺生を禁じられているので、漁師の多くはキリスト教に改宗するという。コロポで訪問した大学の副学長は、定年後、すべてを捨てて出家するつもりだという。

1951年、敗戦国日本の処遇をきめるサンフランシスコ講和会議で、当時セイロン蔵相で後の大統領ジャヤワルダナ氏が、仏陀の言葉を引用し「人はただ愛によってのみ憎しみを越えられる」と述べ日本からの賠償を放棄すると演説。満場の拍手を浴び、各国の日本への態度が大きく変化したという。

仏教がリアルな姿を見せる国である。そこが不思議で、羨ましくもある。信じる心はどのように育つのであろうか。



四天王寺の縁日

人文社会学部 人間福祉学科 専任講師

坂本 光徳

四天王寺では毎月21日、22日に「おだ(た)いしさん」と呼ばれる縁日がある。この日は、中心伽藍^{がらん}を開放し、五重塔などにも無料で入ることができる。また、境内一円に食べ物のお店や日用品、アンティークなどの露店も出ている。たくさんの方が楽しんでいかれる。

私も子どもの頃は21日のみであったが、この露店が楽しみで境内をよく廻っていた。今ではあまり見なくなったが、鯉釣りや亀すくいなどもあり、もらった鯉や亀を育てたりもしていた。

その頃は、四天王寺は聖徳太子のお寺なのでこの縁日を「お太子さん」と思いこんでいた。しかし実はこれは「お大師さ

ん^{こうぼうだいし}」で弘法大師の月命日の法要をする日ということの後年知った。

もともと縁日は、神仏などのご縁のある日を選び祭祀^{さいし}、供養^{くよう}を行う日のことで、この日にお詣りするとご利益が普段より多いと信じられてきた。そのため、たくさんの方がお詣りするので、集客を見込んだ露店が多くでることとなる。今では縁日という神社仏閣で露店が出るお祭りのように捉えられている。

弘法大師は聖徳太子^{さんごう}を讃仰^{さいもん}され、若き日に四天王寺に詣でて、西門にて夕日を拝する日想観^{じっそうかん}の修行をされた。このご縁により大師会^{だいしえ}としてのお詣りが江戸時代より盛んになったと言われている。

縁日に行くときはどのようなご縁があるのかを調べるとまた楽しみも増えるのではないだろうか。

最後に今では22日も行うようになった理由を言うと、実は聖徳太子の月命日という縁日であったからである。私の幼少期の思い込みの「お太子さん」もあながち間違いではなくなった。2日連続で縁日が行われるようになったのも、ある意味ご縁があったのではないだろうか。

◆ 学園歌について



仏教文化研究所 客員研究員

桃尾 幸順

本学は今年大学創立 50 周年、短期大学部創立 60 周年を迎えます。その記念すべき年に当たり、その創設時より歌い継がれてきた学園歌についてお話ししたいと思います。

四天王寺学園は、大正 11 (1922) 年に聖徳太子 1300 年御遠忌記念事業として、天王寺高等女学校が創立されたことに始まりますが、学園歌は、昭和 7 年 (1932) 創立 10 周年式典時に創定されました。学園歌は作歌北原白秋、作曲山田耕筈ですが、当時の学園の教務主任であられた瀧藤準教師が白秋氏の大学の後輩であったことから、依頼をし、快く受けてくださった白秋氏が作曲者として山田耕筈を紹介してくださったことで生まれました。

北原白秋 (1885-1942) は福岡の生まれの詩人・歌人で、詩集『邪宗門』『思ひ出』、歌集『桐の花』、童謡集『トンボの眼玉』などを出版しました。

山田耕筈 (1886-1965) は東京の生まれの作曲家で、交響曲へ長調「かちどきと平和」、オペラ「黒船」、歌曲「赤とんぼ」などを作曲しました。北原白秋と山田耕筈の二人は「この道」「ペチカ」「からたちの花」「まちぼうけ」などの多数の歌曲や童謡を共に制作しています。

それでは次に学園歌の歌詞の意味を考えてみたいと思います。

1 番の歌詞は

木群には 光さしかひ 空高し 浄き此の土 四天王寺 四天王寺
幽けきは いにしへの雲 聖徳の皇子の聖訓
讃めまつれ 崇めまつれよ 讃めまつれ 崇めまつれよ です。

この意味は、木々に光さす、空高く清き浄土の地。四天王寺。奥深く崇高な精神は、はるか昔より続く雲のように、聖徳太子の聖なる御教えは、今なお生き続けている。太子の偉業と徳を讃めたたえ、尊いものとして崇めまつれ、となります。

冒頭の描写は四天王寺境内にあった四天王寺学園のもので、精神的な理想の世界の描写でもあります。心の奥に慈悲の光が差し込み、高い空のように高い理想を持ち、皆の心が浄らかな場所、それが四天王寺学園であるということです。そのような学園にするためには、いにしえより現代に受け継がれている聖徳太子の教えを讀んで実践していくことが必要です。聖徳太子の教えが素晴らしいのは、歴史に残る業績というだけでなく、現代にも通用する教えであるということです。本学では「仏教 I・II」や「仏教概説」の授業で聖徳太子の教えを伝えていますが、学生さんたちも現代に通用する教えであると

感じてくれています。この教えを一人一人が現代に生かしていくためには、聖徳太子に対する尊敬・賞讃の気持ちが大切になります。その気持ちを育てていくためにこの歌詞は大きな役割をはたしています。

2 番の歌詞は

ただ思へ かぎりなき恩 いざ行かな 道は速くも 四天王寺 四天王寺
日に進む新たなる世に 吾が治めおのれ光らむ

讃めまつれ 崇めまつれよ 讃めまつれ 崇めまつれよ です。

この意味は、一心に思え、人は一人では生きられない。限りなき四恩に報いよ。いざ実践しよう。太子の尊い教えを会得するには道は遠いが。四天王寺。日々進化し変化する世界に向かって、仏の戒めを心に持ち、精進し己を磨き、己を輝かせよう。人の役に立ち、欠くことのできない人物になれ、となります。

1 番の歌詞では聖徳太子の教えを尊重することが書かれていますが、この 2 番の歌詞ではその具体的な実践の形が示されています。一つは学園訓にもなっている「四恩に報いよ」ということです。四恩というのは、国の恩、父母の恩、世間の恩、仏の恩のことです。恩に報いるというが大袈裟に考える人もいますが、まずやるべきことは感謝の気持ちを言葉や行動で示すということだと思います。感謝の気持ちを表すことは簡単なようですが、身近になればなるほど難しいものでもあります。たとえ親子であっても感謝の気持ちは表現しないと相手に伝わらない場合があります。日頃から小さなことであっても「ありがとう」という言葉を積極的に使っていくことが大切です。

家族や恩師に対しては自分が幸せになることも恩に報いることになります。自分が就職することや社会で活躍することは、育ててきた家族や恩師にとってもとてもうれしいものなのです。このことは 2 番の歌詞の後半にもつながっています。おのれを磨き、人の役に立つ人間になることが、そのまま自分を育ててくれた人たちの恩に報いることになるのです。

この 2 番の後半の部分は聖徳太子の教学の中核の一つ、「自行化他」の教えに由来しています。自行化他というのは自分のための修行と他の人を助ける行為ということですが、これらは別々のものではなく自行は化他につながり、化他は自行につながっています。たとえば怒りっぽい人が怒らなくなりこやかになることは、本人の成長であると同時に周りの人にとっても喜ばしいことですし、周りの誰かを助けることは自分の成長と満足にもつながります。つまり自分を磨き輝かせることで、周りの人々のためになり、周りの人々を助けることで、自分が磨かれ輝くのです。

学園歌の歌詞に描かれているのは、聖徳太子の教えにつながる高い理想です。しかしその最初の一步は誰にでも踏み出せるものです。少しずつでも自分の悪いところを直し、良いところを伸ばし、周りの人を助け、感謝の気持ちを伝えていくことで、自らを輝かせ周りの人々を照らしていくような存在に近づいていけるのです。そして皆が自分を輝かせることができれば、世界そのものが光り輝き、浄らかなのです。

ウパーヤ学生編集員を募集しています

仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加してくれる学生編集員を募集しています。学科専攻にかかわらず、仏教、寺院、仏像、歴史などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。

これまで第 4 面の「聖徳太子のゆかりの地をめぐる」の取材や記事の執筆、およびその取材見学の様子を本学ホームページで紹介してもらったなどの活動をしてもらってきました。また、本学が仏教教育の一環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状

況をレポートしてもらったこともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第 4 面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声掛けください。ご連絡をお待ちしています。(矢羽野 隆男)



第10回 卒業生インタビュー

話し手：藤波 規容（ふじなみ きよ） 株式会社 QQ English

平成24年3月 経営学部経営学科 卒業生

聞き手：藤谷 厚生（社会学科教授・本欄編集）

仕事について

私は、2012年春に経営学科を卒業し、現在は株式会社 QQ English というフィリピンセブ島の語学学校の営業企画本部マネージャとして勤務しています。フィリピンには800人以上の所属教師があり、セブ島留学やオンライン英会話を提供している会社です。私の仕事内容としては、「留学」と「オンライン英会話」の両セクションを担当し、日々海外オフィススタッフと連携を取りながら日本の方々の英語学習の促進をしています。

もともと経営、マネジメントを学ぶためにIBUに入学しました。入学してニュースの見方が変わり、世界の経済動向に興味を覚え、それまでとは違う「意識」を身につけることができました。また、簿記を学んだおかげで、計算にも強くなり、自分の目標に対して何をすれば良いのかという逆算の考え方もできるようになりました。

礼拝について

仏教での礼拝は、写経や瞑想によって自分に向き合う時間が意識する訓練の一つだったと感じています。実社会に出ると瞑想をする機会が少ないだけに、慌ただしい生活の中でも自分を振り返るという余裕の時間を持つために、大学生のうちに授業として習慣づけられたことはとても効果的だったと思います。忙しい日々の中で、自分と向き合う、リフレッシュすることはとても大事だとつくづく感じます。

また、国際社会に出て気づいたことは、日本人は自国の良いところを伝えることが下手だなあとことです。例えば宗教について、他の国の人々は自分の宗教について大いに語れます。一方日本人は宗教を聞かれたら、何となく「仏教」と答えるものの、仏教とは何か?と問われたら、その返事に行きづまる人が多いのではないのでしょうか。でも、私は大学で仏教の授業を受けたことで宗教とは何か、仏教とは何かを知り、自分が仏教徒であるという自覚や認識を得ることができたので、よかったです。

私自身、初めのうちはなぜ写経をやるのか、その意義が分からなかったのですが、いざやり始めると無心に取り組み、集中力が身についたので良かったです。また、聖典聖歌集も忘れてはいけませんので、決められたことを守るという社会人の当たり前前のルールが身につきました。社会に出たらたくさんのルールがあり、そのルールに従わないといけないという自分自身を引き締める心を培う上で大いに役立ちました。

いまマネジメントをする側になって、新卒の社員を見れば、ルール・規則にしたがって取り組む社員と、そうでない社員の違いが明確です。結局のところ、何事に対してもきちんとして出来ない社員は意識がないのだと思います。四天王寺大学の学生さんは礼拝で厳しい教育を受けているので、むしろ社会人になる上でもルールや規則にしたがって取り組む意識

づけの訓練としても活かされていると思います。

また、礼拝では聖歌をみんなで歌ったという思い出がありますが、特に「父母の歌」は、歌詞が良くいい歌だと思います。

学園訓について

「和」と「恩」という言葉は、とてもよく覚えています。社会に出て何をするにしてもこれらを大切にしています。

実は、私は自分で起業する夢と、出来ればそのことを学生や生徒にも教えたいという希望もあり、初めは別の大学で教育関係の学部に入りました。しかし、制度が変わったことをきっかけにその大学を辞めて海外にいった経歴があります。帰国後、ちょうど新しくIBUに経営学部ができるというCMを見て、それでIBUに入学を決意した次第です。ある時、寝坊をしまい聞きたい授業が受けられませんでした。その時「悔しい」と思ったのです。今まで勉強に対してそんな思いを抱くことは正直ながらありませんでしたので自分でも驚きました。IBUは、私に勉強の楽しさを教えてました。また、勉強以外にもボランティア活動や海外旅行、海外インターン、アルバイトなどとても充実した大学生活を送ることができました。この大学からとても自信をつけさせてもらえたような気がして、大学時代の経験は今の私自身の核となっています。これも「誠実」「健康」といった学園訓のキーワードが活かされていると思います。

社会に出て困った時にどれだけそれに役立つ引き出しを持っているか、これが非常に大切だと思います。そしてその引き出しは、いろいろな経験と知識によって、私自身に育まれるかけがえのないものだと思います。

在学生へのアドバイス

後輩の皆さんには、ぜひ大学生のうちにいろいろなことにチャレンジしてもらいたいと思います。ぜひ海外に行ってほしいし、一番時間が取れる学生時代を有効に活用していただきたい。

2020年には東京オリンピックもあります。グローバル化する国際社会の中で、自分自身の言葉で日本の良いところをどんどん発信してください。そして、自分自身の好きなこと、やりたいことを貪欲に探してください。有意義な学生時代が過ごせるようにどんどん色々なことにチャレンジし、多くの経験を積んでほしいと思います。



平成28年度 冬学期「仏教Ⅱ」講話題目

- 9月15日 学長 岩尾洋先生「写経の意義」、杉中康平先生「オリエンテーション」
楠本久美子先生&教育学科保健教育コースの皆さん(田中友貴さん・西田舞さん・林明寿香さん)「朝食と脳活性について」
- 9月29日 鈴木崔史先生「写経の仕方・作法」
- 10月6日 坂本光徳先生「写経について」
- 10月13日 拜田清先生&学生(中安将也さん・三浦一真さん)「海外体験について」
- 10月20日 矢羽野隆男先生「学園訓について(誠実)」
- 10月27日 藤谷厚生先生「四恩について」
- 11月10日 岡崎英樹先生「『学歴無用論』からみる50年後」
- 11月17日 坂本光徳先生&喫煙マナー向上委員会の皆さん(酒井優さん・正中亜登夢さん・出向井優一さん)「喫煙マナーについて」

- 11月24日 武田盛夫先生&教育学科小学校・幼児保育コースの皆さん(赤星光祐さん・瀧上愛さん)「震災とボランティア～私たちがすべきことは～」
- 12月1日 ゼミコンテスト発表(井川ゼミの皆さん・神辺真衣さん・紺谷拓郎さん・清水健太さん・橋本舞さん、上野ゼミの皆さん・谷奈南さん・中川遥さん)
- 12月8日 坂本眺美先生・斎藤敏之先生& e-COCOROEプロジェクトの皆さん(中川和也さん、中野友梨加さん、本多天汰さん、吉田侑末さん)「人権週間にちなんでーSNS等情報リテラシーー」
- 12月15日 源健一郎先生「無常について」
- 12月22日 川下維信先生「学生相談室の利用について」
- 1月12日 桃尾幸順先生「本学の仏教教育について」
- 1月19日 杉中康平先生「仏教Ⅱまとめ」

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

— 飛鳥寺 (奈良県高市郡明日香村) —

第32代崇峻天皇の元年(588)、蘇我馬子は日本最初の本格的寺院の建立を発願(計画)し、聖徳太子と共に8ヵ年の日数を費やし、推古4年(596)に法興寺を創建しました。法興寺はその後、平城京へ移転され元興寺と呼ばれましたが、飛鳥の地にも残されました。それが現在の飛鳥寺(正式名称は現在は安居院)です。残念ながら創建当初の伽藍は仁和3年(887)と建久7年(1196)の2度の火災によって焼失し、室町以降は荒廃しました。しかし、江戸時代の寛永9年(1632)と文政9年(1826)に再建され今日に至っています。現在、真言宗豊山派に属し、新西国第9番、聖徳太子第11番の霊場でもあります。

飛鳥の寺院には様々な伽藍配置がみられ、その配置は朝鮮半島の寺院と共通する要素もあります。『日本書紀』には、多くの博士、工人が朝鮮半島から渡来して造営にあたったと記されており、その影響があると指摘されています。飛鳥寺の伽藍配置は、昭和31年(1956)からの継続的な発掘調査の結果、塔を中心にその北と東西の三方に金堂が建っており(一塔三金堂)、その周りには回廊があり、北側に講堂、南側に中門と南門の跡があることが判明しました。



東西200m、南北300mにおよぶ、飛鳥では最大規模の寺院だったのです。現在の本堂は、塔の北に位置していた中金堂の場所にあり、銅製のご本尊様は創建当時から1400年余り同じ場所に座っておられます。



本尊の飛鳥大仏(釈迦如来坐像)は推古13年(605)、天皇が聖徳太子や蘇我馬子および各皇子と誓いを立てて発願し、同17年(609)鞍作鳥(止利仏師)に造らせた日本最古の仏像で、重要文化財に指定されています。聖徳太子が十七条憲法を示されたのも、このご本尊様に誓ってのことだったそうです。

このご本尊様のお顔は、面長で上脛と下脛を曲線であらわした杏仁形(アーモンド形)の両眼、丸くカーブした両眉から連なった高い鼻など止利仏師の様式の特徴を示しています。火災にあって、補修を受けているため、当初からそのまま残っている部分は顔面、左耳、右手の中指、薬指、人差し指などですが、日本最古の仏像をすぐ近くで目にするのができるのは奇跡的なことですね。

11月27日に行った今回の取材見学は、あいにくの雨でしたが、ある学生編集員の「雨の日の紅葉も楽しみ」という趣のある一言でモチベーションは上がり、ローカルバスで巡る取材に雨の紅葉の楽しみも加わりました。

(ウパーヤ学生編集員：田村美咲)

仏教のことば

— 三慧 —

『般若心経』は、仏の覚りに至る智慧(般若)の完成が、この經典を誦する私達の取り組みべき課題であることを教えています。「仏」は真理に適った人間としての正しい在り方・姿を体得した存在、「覚り」はその在り方・姿を体得すること、「智慧」は仏の覚りを完成させる働きであり、真理に照らして正しく物事を認識し

判断し行動する能力のことをいいます。この仏の覚りに至る智慧の完成を、修行の順序により「聞慧」「思慧」「修慧」の三段階において説くものが「三慧」の教えです。「聞慧」は仏教の教えを正しく聞くことによって得られる智慧、「思慧」は聞いた教えを正しく思考することによって得られる智慧、「修慧」は聞いて思考した教えを正しく実践することによって得られる智慧を意味します。仏教の經典には「誦聴(誦かに聴け)」ということが説かれていますが、仏の覚りに至る智慧は、教えを明らかに聞くことを始めとして、教えを正しく思考し、これを正しく実践することによってこそ完成されるものであることを、「三慧」の教えは示しています。

(兼子恵順)

編集後記

創立以来、大学で50周年、短大で60周年を迎えるこの年に、本誌も10年の区切りとなった。それにふさわしく、今号のキーワードは「巡る」だ。桃尾先生ご解説の学園歌には四天王寺を巡る眺望が詠われ、境内での縁日には幼少の坂本先生が巡っておられた。井川副学長はスリランカを巡り、学生編集員は雨の紅葉の飛鳥寺を巡った。卒業生の方はいったん他大学を巡った後に本学に入学、その体験を礎に活躍しておられる。長らく本学で仏教教育に携わって頂き、本学の歴史を巡ってこられた兼子先生には、「般若心経」に説かれる三つの智慧の巡りについて説いて頂いた。感謝したい。

(K.M)

研究所員紹介

所長 岩尾 洋(学長・教授)
主任研究員 矢野野 隆男(教授)
研究員 上續 宏道(教授)
兼子 恵順(教授)
藤谷 厚生(教授)
源 健一郎(教授)
杉中 康平(准教授)
奥羽 充規(講師)
坂本 光徳(講師)
南谷 恵敬(客員教授)
桃尾 幸順(客員研究員)

UPAYA(ウパーヤ) 10号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

平成29年4月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前三丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-0611

URL: <http://www.shitennojij.ac.jp/>

「UPAYA(ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。

E-mail bukken@shitennojij.ac.jp
(件名は「ウパーヤ」としてください)

